特集 第12回 まちづくり賞

まちづくり奨励賞

宮城県塩竈市

塩竈の歴史と文化を活かしたまちづくり

特定非営利活動法人NPOみなとしほがま

まちづくり奨励賞

静岡県浜松市中野町

「まん中の町」明日も健やかな町へ3つの処方箋

中野町（なかのまち）を考える会

まちづくり優秀賞

福岡県北九州市八幡西区黒崎

寿百家店プロジェクト

株式会社寿百家店

まちづくり優秀賞

静岡県菊川市

明治の赤レンガ製茶工場遺構が解体危機を乗り越え、菊川のまちづくりの拠点へ

NPO法人菊川まちいき

まちづくり大賞

佐賀県佐賀市

佐賀城下のクリークを活かしたまちづくり

さがクリークネット

まちづくり奨励賞

奈良県桜井市

三輪山をシンボルとする桜井地区のエリアマネジメント

都市再生推進法人 桜井まちづくり株式会社

桜井市本町通・周辺まちづくり協議会

まちづくり奨励賞

鹿児島県奄美群島

「伝泊＋まーぐん広場」×集落文化を中心にした「日常の観光化」によるまちづくり

一般社団法人しま・ひと・たから

総評

建築士の職能の拡張とまちづくり

佐藤 滋 | まちづくり賞選考委員会 委員長、早稲田大学 名誉教授

1970年代の初めに動き出したまちづくりは、その中頃には早くも流行語のように使われていた。その思いはさまざまであったが、次第にその中核を建築士が担うようになり、防災、福祉、あるいは中心市街地、歴史まちづくりなど対象を明確にした活動が、住民と専門家そして行政が一体となって半世紀の歴史を刻んでいる。この建築士会連合会のまちづくり賞もそうしたものの成果が、これまで受賞の対象になってきた。特に大賞に選ばれるものはここ数回、いわゆる有名事例で、その名前を聞けば誰もが納得する活動が受賞していた。

さて、まちづくりの半世紀を迎えた今回の応募、その中から1次選考で選出されたされたものは、そうしたこの半世紀まちづくりの歴史を越えて顕著な特徴があり、新しいまちづくりを自ら拓き、建築士職能の拡張を感じさせた。それぞれめざしている方向が異なるために、どういう観点から審査をするか、特に1つの大賞を選ぶための採点には苦慮したものと思われる。

そうした中で大賞に選ばれた「佐賀城下のクリークを活かしたまちづくり」は地球環境・SDGsの時代にふさわしいものとして、高い評価を得た。都市と地域とそして建築、それを支える専門家と市民が一体となって、まちづくりの新しい方向性を示し、今後の建築士のリーダーシップの拡張を示唆している。広域にわたる水環境と農業・商業・都市活動が、クリークという伝統的な環境マネジメントの仕組みによってつなげる活動が、地球環境の時代の建築士のフィールドを開拓するものとして評価された。

これに対して「寿百貨店プロジェクト」は、ローカルビジネスの展開の中核を建築士が担っている。特にこのビジネスが自生的というか自然発生的というか、建築士と事業主体と、そして使い手が渾然一体となって、建築士はその中でいくつもの役割を果たす、そんな建築士を中核としたまちづくりの動きであり、地域社会とともにある建築士像を示したものと言えよう。

また、「明治の赤レンガ製茶工場遺構」のまちづくりも、建築士が、厳しい運動の推進役となって、単なる反対運動ではなく、提案型の活動の中核として積極的な役割を果たしたこと、建築士のまちづくり活動をそのレベルまで進めて、見事に成功に導いた成果で優秀賞に選ばれた。

「桜井地区のエリアマネジメント」は、地方都市中心商店街のエリアマネジメントというまさに本流のまちづくりを、多くの関係者を巻き込む活力に満ちた実践であった。本流であるためか、特筆すべき斬新な取り組みと比べて奨励賞にとどまった。

また「伝泊」の取り組みも、建築士が事業主体を組み立てて、観光だけではなく福祉事業も含めた地域づくりを進めている建築士のモデルとなる活動である。

今回のまちづくり賞は、この混迷の時代に自らがその職能の在り方にチャレンジする、そんな方向性を示していて、この賞にふさわしいものであった。

連合会からのお知らせ

募集開始！

2023年度 第12回 公益社団法人 日本建築士会連合会

まちづくり賞の募集

応募期間

2023年4月1日(土)～6月30日(金)

賞の趣旨

(公社)日本建築士会連合会では、より身近になった市民まちづくりのなかで、建築士や建築士会としての専門性をいかんなく発揮し、みごとにその役割を果たしてきた活動を支援するとともに、他団体、地域との連携を強化した地域まちづくりのさらなる発展に資するため、優れたまちづくり活動等の実績を評価・表彰します。

今回で第12回目を迎えるまちづくり賞への多くの活動事例の応募を期待します。

※基本的には対面形式となるが、情勢によってリモートの場合もあり。

選考対象

地域における継続的なすぐれた

住まい・まちづくり活動の実績あるもの

例えば

1. 建築物調査、保全・再生
2. 景観形成・街並み保全
3. 地域活性化
4. 教育・人づくり
5. ユニバーサルデザイン
6. 環境保全
7. まちづくり的な住まいづくり
8. 住環境整備
9. 防災まちづくり
10. 復興まちづくり
11. 福祉まちづくり
12. 木のまちづくり等

選考の視点

応募資格

■建築士個人、
　または、その建築士が参画しているまちづくり活動団体
■建築士会または会員が推薦する個人、あるいは団体

選考・表彰

一次選考■第一次選考事例から概ね7点程度をまちづくり大賞候補とする。

最終選考■まちづくり賞の大賞候補は、2023年10月26日に第12回「まちづくり賞発表会&公開選考会」(静岡)にて公開審査を行い、まちづくり大賞(1点20万円)、まちづくり優秀賞(2点各10万円)およびまちづくり奨励賞(4点程度)を決定する。全国大会「しずおか大会」式典の中で表彰する。

※式典での表彰が取りやめになった場合は、郵送します。

第11回まちづくり大賞

応募方法

必募要項・必募用紙等は、日本建築士会連合会のホームページからダウンロードしてください。

http://www.kenchikushikai.or.jp

提出先

(公社)日本建築士会連合会 地域活動部「まちづくり賞」係

〒108-0014 東京都港区芝5-26-20 建築会館5階

e-mail chiiki@kenchikushikai.or.jp

第12回まちづくり賞の選考経過

清水耕一郎 | 日本建築士会連合会まちづくり委員会 委員

日本建築士会連合会のまちづくり賞は、まちづくり活動のなかで優れたものを発掘・顕彰・支援するとともに、地域や関連団体との連携を強化した地域まちづくりとしてのさらなる発展に資するため、評価・表彰するものである。その選考は隔年で行われ、今年は12回目の開催となった。全国から27事例の応募があり、第1次選考はまちづくり委員会委員に青年委員長と女性委員長が加わり、2023年8月28日(月)14:00〜17:00に日本建築士会連合会会議室にて行われた。投票権は持たないが、担当副会長並びに特別顧問も同席し、討議に参加した。

あらかじめ各委員が応募資料を読み込み、まちづくりの発想・着眼、先進性、プロセス、成果、波及効果、継続性、総合性の7つの視点別に各視点3点満点で評価・投票した集計を参考にしながら、慎重に検討を重ね、まちづくり賞として7事例を選考した。

大賞の選考は建築士会全国大会「しずおか大会」前日の2023年10月26日(木)12:30〜15:30に静岡にて公開で行われた。審査委員長は佐藤滋氏(早稲田大学名誉教授)、委員は髙田光雄氏(京都大学名誉教授・京都美術工芸大学教授)、木村精治氏((有)都市環境デザイン研究所所長)、伊東龍一氏(日本建築士会連合会まちづくり委員会委員長・熊本大学名誉教授)、後藤治氏(工学院大学理事長/当日欠席)の5名。

まず、まちづくり賞に選考されている7事例についての発表があり、続いて選考委員から発表者に対する質疑が行われた。その後委員各5票を持っての投票が行われ、結果をみながらの選考委員相互の意見交換があり、上位から順に選考することになったが、同票が出たため再度選考委員で討議し、同票者のみを対象とした挙手による再投票を行い、まちづくり大賞に「佐賀城下のクリークを活かしたまちづくり」(佐賀県)、まちづくり優秀賞には「寿百家店プロジェクト」(福岡県)と「明治の赤レンガ製茶工場遺構が解体危機を乗り越え、菊川のまちづくりの拠点へ」(静岡県)の2点を、その他の4つの活動をまちづくり奨励賞に選出した。

最後に4名の選考委員から講評があり、7つの受賞事例にはいずれもまちづくり活動としての魅力的な個性があることが評価され、今後の展開・継続に期待が寄せられた。

事例発表を聞く審査委員のみなさま(赤川真理氏撮影)

公開選考会の会場(小野全子氏撮影)

選考委員講評

第12回まちづくり賞の選考を終えて

髙田光雄 | 京都美術工芸大学 副学長、京都大学 名誉教授

前回（第11回）のまちづくり賞の講評に当たって、「選考の困難性」が強まっていることを指摘した。その理由として、活動の多様化・高度化、長期活動団体の評価の困難性、建築士の役割の多様化、基礎自治体のまちづくり支援施策の格差などを挙げた。今回も、選考の困難性は一層強まっている。本賞の評価基準は、まちづくりの発想・着眼、先進性、プロセス、成果、波及効果、継続性と総合性であるが、発表された7団体は、いずれの項目も高く評価でき、単純に優劣をつけることは困難であった。こうした状況の中で、最終的には、現在の社会状況を考慮して、その意義が明快に理解でき、かつ、全国のまちづくり活動に強い波及効果をもつと判断される活動がまちづくり大賞や優秀賞に選ばれたように思われる。

まちづくり大賞を受賞した「佐賀城下のクリークを活かしたまちづくり」は、地域資源そのものと実際の活用状況が極めて魅力的で、さらなる継続、展開に向けて大きな期待が持てる。地域住民の活用を第一に考え、その活用状況が観光資源となるという考え方にも強いシンパシーを感じた。

まちづくり優秀賞を受賞した「寿百貨店プロジェクト」は、シャッター商店街を独創的な企画と実現に向けた力強い取り組みによって活性化させた事例で、各地での波及効果が期待できる。同じく、まちづくり優秀賞を受賞した「明治の赤レンガ製茶工場遺構が解体危機を乗り越え、菊川のまちづくりの拠点に」は、歴史的建造物の保存運動のプロセスとともに、工場遺構をまちづくり拠点として継続的に活用していることが注目された。

まちづくり奨励賞を受賞した4つの活動も、上記の活動に勝るとも劣らない内容であった。たとえば、「三輪山をシンボルとする桜井地区のエリアマネジメント」は、24年間にわたり、多様な活動を蓄積してきたもので、個人的には多大なる敬意を表したいと思う。ただ、まちづくり大賞へのアピールという意味では表現が難しく、審査員側の選考の困難性にもつながったと考えられる。いずれにせよ、発表団体すべての活動のさらなる発展を期待したい。

選考発表会での気づき

木村精治 | （有）都市環境デザイン研究所 代表取締役

選考者が変われば評価も変わる

全国大会開催県からの選考委員であり、最終審査に県内事例が2つ選考されていたが、審査に公平性などをもって臨んだ。

選考は非常に難しかった。選考の視点が示されているが、多彩な関係者の活動、活動時期（初動、成熟、転換）、市民組織からNPOや法人等が取組主体など活動目的や課題解決のプロセス等が異なり、選考の同じテーブルに載っていないからである。

選考者が変われば評価も変わる状態。

「まちづくり賞」は活動内容等の優劣を決めるのではなく、「課題設定の方法」「取組みやすさ」や「エールを送りたい」等を探し、他地域の課題解決や建築士がまちづくりの気づきやヒントになり、お持ち帰りできそうな事例を自分なりの評価とした。

活動発表からキーワードを発見

①気づきと行動力　建築士の主導型から支援・伴走型へ

特に、女性の視点と行動力が大賞を含む3事例から見出された。気づきで終わるのではなく、生活者の視点から地域課題の解決と、多様なステークホルダーを巻き込む行動力と推進力が素晴らしかった。地域住民主体の課題解決の中で、建築士の役割が主導型から支援・伴走型へ移行していることを理解した。

②将来を語り、共感と関係性の広がる活動の継続

将来の魅力ある地域像を共有し、人との関係性を深め、活動の目的や内容等が共感できる取組みが選考に残ったと思う。

まちづくり大賞の事例は社会潮流を踏まえ、水辺環境等の課題を誰もが共感できる「わかりやすいテーマと楽しい活動」で示し、各自がどこからでも参加しやすいしくみを創った。また、多様なステークホルダー間の活動連携なども参考になると感じた。

③マスメディアの情報発信力はまだまだ強い

SNS等の情報発信力が強い中、TV放映は関心が希薄な地域住民に活動の周知と関心を広げる効果があり3事例に見られた。

最後に、最終選考に残らなかった事例を見直し、復活選考を希望。

まちづくり賞の講評

伊東龍一 日本建築士会連合会まちづくり委員会 委員長
熊本大学 名誉教授

私は今回から始めて審査に加わりました。歴史的なまちなみを対象にしたり、町並みのなかの歴史的建造物を活用してのまちづくりを行う活動団体の多さに驚きました。私じしんは日本建築史を専門に研究してきたこともあり、歴史的まちなみや歴史的建造物に関心の中心がありましたので、たいへんうれしく思いました。すでにスクラップ・アンド・ビルドの時代は遠くなったと思う一方、ここまで歴史の積層した空間を残しながら活用するまちづくりが浸透しているとは思いませんでしたので感慨深いものがあります。

さて、応募された活動は全部で27点でした。まちづくりには一定の時間が必要で、活動には継続性が求められます。応募作品には、長期間にわたる活動であるものが多くを占めました。もちろん活動期間は短くても、すぐれていれば評価されて当然だと考えますが、今回は時間をかけてじっくりつくりあげられてきた活動が多く、その重みには注目せざるを得ませんでした。

そういった時間をかけて練り上げられたまちづくり活動は、その期間においてバージョンアップされているものがほとんどです。運営体制の改良や取り組み内容の広がりや深まりが見られます。

このように、応募の内容を見る限り、その多くが実に重厚な内容をもつ立派な活動でした。だれもが賞賛を惜しまない内容がたくさんあって、その優劣を見極めるのは極めて困難であるように思われました。ただ、まちづくりは、その地域をじっくり見つめなおすところからスタートするものだとすると、地域の性格がそれぞれ違う以上、その取り組みであるまちづくりの進め方も多様にならざるをえません。地域の数だけまちづくりがあると言えなくもありません。

そこで注目されてくるのは、その活動の波及性でした。地域を超えて、建築士が実践するまちづくりに役立つ内容があるかどうか、が審査の大事なポイントとなりました。

今回の大賞や優秀賞には、これまでの活動の内容が優れているばかりでなく、建築士がまちづくりに取り組む際のヒントがたくさんある点で共通しています。ほかの作品にそれがないというわけではありません。最後はやはり総合的な判断で賞が決定されました。

表 第12回まちづくり賞 応募事例一覧

賞	まちづくり事例の名称	まちづくり活動団体	活動地域
まちづくり大賞	佐賀城下のクリークを活かしたまちづくり	さがクリークネット	佐賀
まちづくり優秀賞	寿百家店プロジェクト	株式会社寿百家店	福岡
	明治の赤レンガ製茶工場遺構が解体危機を乗り越え、菊川のまちづくりの拠点へ	NPO法人菊川まちいき	静岡
まちづくり奨励賞	三輪山をシンボルとする桜井地区のエリアマネジメント	都市再生推進法人桜井まちづくり株式会社（兼）桜井市本町通・周辺まちづくり協議会	奈良
	「伝泊+まーぐん広場」×集落文化を中心にした「日常の観光化」によるまちづくり	一般社団法人しま・ひと・たから	鹿児島
	「まん中の町」明日も健やかな町へ３つの処方箋	中野町を考える会	静岡
	塩竈の歴史と文化を生かしたまちづくり	特定非営利活動法人 NPO みなとしほがま	宮城
	美しい農村風景づくり	澤田勝彦（個人）	福島
	割竹を用いた仮設舞台ステージでの野外演劇の上演	九州大学大学院人間環境学府空間システム専攻 末廣香織研究室 Team Bamboo	福岡
	桜咲き緑あふれる高見三条の街並み継承の取り組み	高見三条街並み協定運営委員会	福岡
	飛騨高山の山林資源活用による循環経済モデルの実践	特定非営利活動法人 活エネルギーアカデミー	岐阜
	地域色を引き継ぐ―住宅新築リフォーム講座―	秋田県建築士会仙北支部	秋田
	2040プロジェクトの活動	山梨建築設計４団体2040プロジェクト	山梨
	里山を拠点としたまちづくり「百年亭再生プロジェクト」	認定NPO法人 宍塚の自然と歴史の会	茨城
	今帰仁村中央公民館の保全活動から持続可能な沖縄へ	公益社団法人沖縄県建築士会 まちづくり委員会	沖縄
	景観を守り育てるまちづくり活動30年	NPO法人まちのよそおいネットワーク＆山口近代建築研究会	山口
	青森県内の小学生を対象とした建築デザインコンテスト2013～2019年	一般社団法人青森県建築士会 まちづくり委員会	青森
	Circleこみせ	Circleこみせ	青森
	石切回廊+ひらくきち／地域のひろばづくり	石切のわ	大阪
	小学校住教育（家庭科）サポート事業	特定非営利活動法人 住・環境支援ネット	群馬
	世界に一番近い城下町からの「木の文化」の発信	本町のまちづくりを考える会	大阪
	里松文化/文化住宅から始めるコミュニティ形成	一般社団法人 baamu lab.	大阪
	旧町名東町を中心とした米沢のまちづくり	東町プラットフォーム	山形
	「地域見守りたい！」地学連携による空き家活用プロジェクト	一般社団法人まちづくり鳶巣	島根
	ヤドカリプロジェクト	株式会社リージョン・スタディーズ	静岡
	河原田本町商店街活性化事業	かわはらだ未来塾	新潟
	おひがしさん門前未来プロジェクト	おひがしさん門前未来プロジェクト	京都

まちづくり大賞

事業名　佐賀城下のクリークを活かしたまちづくり

受賞団体　さがクリークネット | 活動地域　佐賀県佐賀市

川﨑康広 | さがクリークネット 会長

私たちが佐賀県佐賀市の中心市街地で行なっている「さがクリークネット」の活動についてご紹介いたします。

クリークとは？

九州北部に位置する佐賀県佐賀市は、干満の差日本一の潮汐現象を誇る有明海と、それにより形成された九州最大の平野（筑紫平野）の上に位置しています。

この「低平地」とも呼ばれる、海抜が低くどこまでもフラットな地形は、古来より稲作文化を根付かせ、米づくりや醸造文化、有明海の海苔の生産といった地域産業を発展させ、今では地域の人々にとって無くてはならない地域の特徴であるとともに、地域文化を支える大きな基盤ともなっています。

一方、低平地であるということは、海との高低差がほとんど無いために、街中の雨水が海に排水されるのに時間が掛かるうえ、満潮の時間は海へ排水できないなどの「治水」の難しさや、広大な平野で日常的に必要な生活用水や農業用水といった淡水を平野の隅々まで配るための「利水」の問題など、古くから「晴れたら干ばつ、降れば洪水」と言われるほど、水のコントロールには大変苦労の絶えない地域でもありました。

そういった場所で暮らし、城下町を築いてきた佐賀の先人たちは、都市の中での生活・農業用水の確保や雨水の貯留・排水、さらには物資や人の輸送（舟運）、防衛といった複合的な機能を併せ持つ、川とは違う性格の「クリーク」という人工の多目的水路を平野の隅々に至るまでびっしりと築き上げ、「水」と寄り添う暮らしの基盤を、さまざまな知恵と工夫を持ってつくり上げてきたのです。

現在でも街の至るところに存在しているクリークの総延長は、佐賀市中心部だけでも2,000km以上が現存し、この地域ならではの土木遺産として、街の環境維持や雨水の排水路としての機能を果たし続けています［図1］。

地域課題と地域資源を同時に考えてみる

佐賀市中心市街地は他の地方都市と同様、少子高齢化や人口の郊外流出が進む都市の一つであり、同時に、近年の気候変動による

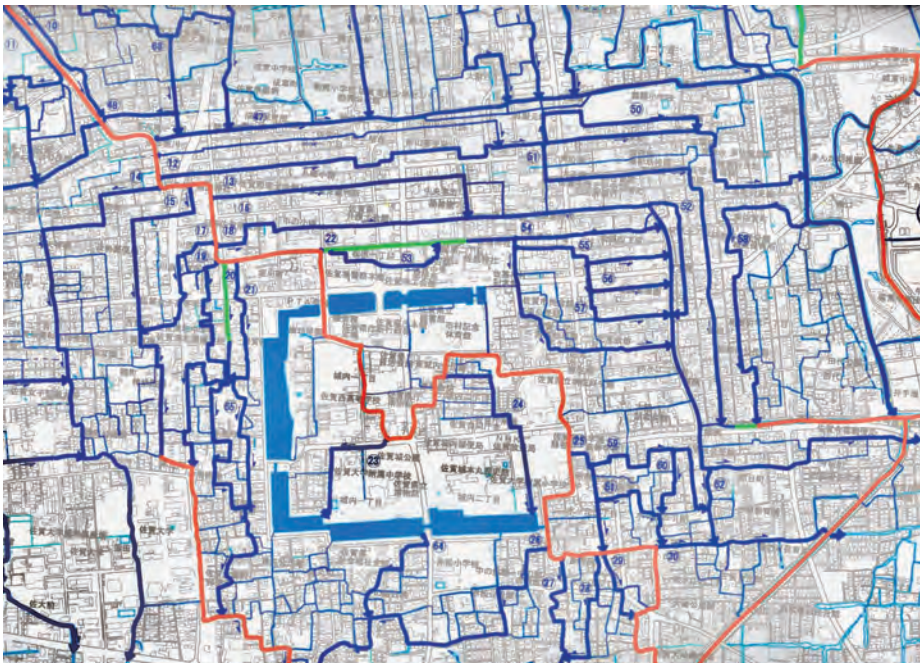


図1（上）　佐賀市中心市街地のクリーク（水路）図、写真1（右）　内水被害（令和元年九州北部豪雨）

写真2　船着場づくりWS（2015年8月）

内水被害が毎年のように繰り返されるような状況にもなってきています［写真1］。

私たちは、建築士としてそういった地域課題と日々向き合いながら、人々の生活の質の向上について考え、提案していく役割を担っているわけですが、街の課題（マイナス面）を改善していくということと、地域特有の文化や歴史といった魅力（プラス面）を付加するということを同じ議論の中で考えていくことができないものかと、日々想い巡らせていた中で、少しずつ「クリーク」というこの街ならではの地域資源に価値を見出しながら、この先の持続可能な暮らしを実現していく、まちづくりの一つの方法が見えてきたように思います。

建築仲間と街の資源（クリーク）を使ってみる

クリークを活用したまちづくりが動き出したのは、佐賀市街なか再生会議（佐賀市主催）が開催した「クリークシンポジウム（2014年）」で利水・治水に詳しい専門家やクリークの歴史を研究している方などと出会ったことがきっかけでした。

佐賀市中心市街地のクリーク網を使った地域課題の改善と、地域資源の魅力UPについて、その想いを共有したメンバー（佐賀市の職員や建築仲間、専門家など）とともに、まずはクリークの実態を確認するため、カヤックに乗って街なかのクリークを進んでみることにしました。

すると、それまで考えられていた「街なかの水路は危険で汚い」といったイメージとはまったく真逆の、美しい緑や澄んだ水面、ゆったりと泳ぐ小魚や、石垣、石橋などの歴史的な構造物など、まさに「地域の魅力そのもの」とも言えるような素晴らしい風景が目の前に現れたのです。

さっそく私たちは、より多くの市民にクリークの価値を再認識してもらおうと、関係各所に協力を仰ぎ、安全に水面に下りるための船着場づくりワークショップと、クリークの素晴らしさを体験してもらうためのフィールドワークを開催しました［写真2］。

そういった取り組みが発端となり、佐賀県建築士会をはじめとする各種団体や行政、企業、大学、自治会、市民など多彩なメンバーが集まり、「さがクリークネット」という名称で街なかのクリークを活用したまちづくりが本格的に動き出しました。

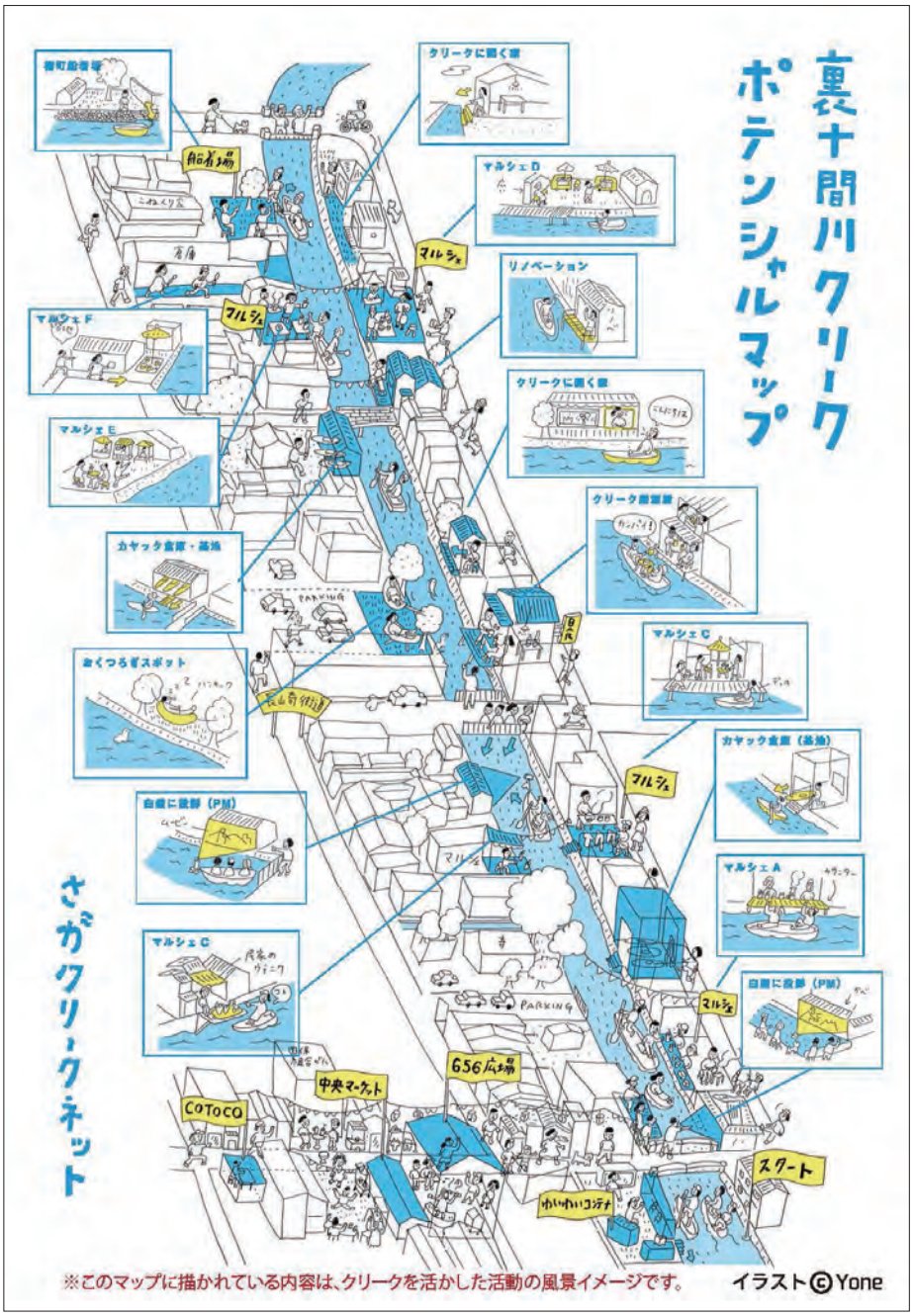


図2　裏十間川クリークポテンシャルマップ

裏を表へ

2年目からは、カヤックや和舟体験といったアクティビティに加え、江戸時代より商業地として栄えてきた柳町・呉服元町といった長崎街道沿いの敷地の裏にあたる水路（裏十間川）での、賑わいづくりの取り組みへと発展していきました。

近年、商業の衰退とともにアーケードが取り外され、空き店舗が増えていたこのエリアで、いつしか裏となってしまっていたクリークにもう一度光を当て、水辺とともにある豊かな暮らしの風景を取り戻したいという共通認識のもと、まずは水路沿線の住民の理解を得るため、「裏十間川クリークポテンシャルマップ」［図2］を作成し、直接水路沿いの一軒一軒の方へ私たちのビジョンを伝えながら、地域の自治会とも連携して活動を進めました。

水辺の空間を街なかの目的地の一つとしてもらうため「クリークマルシェ」や「水辺で乾杯」、「クリークウォーク」など、さまざまな人たちとアイディアを出し合いながら活動を展開し、市民が日常的にクリークを感じることができるよう、この場所らしい賑わいづくりに取り組んでいきました[写真3]。

2018年に約10カ月間にわたり開催された明治維新150周年を記念した維新博覧会（佐賀県主催）では、佐賀と同様に低平地の歴史を持つオランダとの交流拠点（オランダハウス）に船着場が設置され[写真4]、カヤックや和舟でのクリーク体験や、オランダからデザイナーを招聘したクリエイティブディスカッション、カヤックづくりワークショップなどを開催し、官民連携で佐賀のクリークを内外へと大きく発信する絶好の機会となりました。

「活用」と「保全」の両立

一方、近年多発している内水被害について、街なかのクリークが雨水の貯水・排水の面で果たしている役割は大きく、将来にわたって水路を維持保全していく取り組みも重要な課題となっています。クリークは流れが緩く、勾配もほとんど無いため、少しずつ堆積していく土砂や水草の除去などを人間の手で定期的に続けていく必要があるのです。

佐賀市には春と秋の年2回、住んでいる地域の水路掃除をする風習があるのですが、最近では少子高齢化や関心の薄れなどから、年々クリークの手入れが行き届かない場所が多くなってきています。

そのため、さがクリークネットでは、街なかクリークの「活用」と「保全」。つまり、クリークをみんなで使いながら、みんなで維持していくための実践的な取り組みとして、世界自然保護基金（WWF）や環境系CSO、企業などとも連携した環境レクチャーや水路清掃なども実施しています[写真5・6]。

近年話題となっている、海洋プラスチック問題やヒートアイランド現象、生物多様性への影響など、SDGsの観点からも持続可能なクリーク環境を維持していくことは、大切な問題であると考えています。

コロナ禍を経て次の展開へ

2020年から猛威を振るうようになった新型コロナウイルスは、地域コミュニティの醸成が大切だと言われるまちづくりの活動にとって致命的な出来事となりました。

これまでのようなクリークを活用したイベントだけではなく、川掃除やミーティングに至るまでさまざまな行動が制限される事態となり、活動ができない（しづらい）期間がおよそ3年にわたり続くことになりました。

その間に、一緒に活動してきたメンバーや、連携してきた行政や団体の担当者の異動、交代など、体制の変化もありましたが、ようやく2023年から、新たな活動を少しずつではありますが、再開することとしました。

「KAWADOKOプロジェクト」[図3]と名付けた新たな活動は、市街地の比較的浅いク

写真3　フィールドワーク（2016年5月）

写真4　オランダハウス船着場（2018年3月～2019年1月）

写真5　川掃除イベント（2018年7月）

写真6　環境レクチャー（2019年11月）

写真7　KAWADOKOプロジェクト（2022年8月～10月）

写真8　水上ライブ（2023年10月）

図3　KAWADOCOプロジェクトチラシ

リーク（松原川）の中に市の許可を受けた上で約1坪の床を設け、市民に自由に思い思いの使い方をしてもらう、というものです。

これまでは、どちらかというと私たちが主体的にイベントを仕掛け、それによって市民を巻き込んでいくという活動手法が主でしたが、今回は市民に自由な時間に自由な使い方でクリークを楽しんでもらうという仕掛け方に転換しました。

すると、川床の設置期間中は、そこを使って学生が勉強をしたり、お茶の先生が野点の会場にしたり、夜には飲み会が行われたりと頻繁に活用され、公共空間であるクリークが市民の目的地となり、コミュニティや賑わいを生み出す場所となって日常的に活用されている、素晴らしい風景が出現しました［写真7・8］。

図らずも、私たちが当初からめざしていた、街の地域資源を活用して持続可能な暮らしに繋げていくという想いを、地域住民自らが日常の生活の中で主体的に実現してくれたのです。

楽しみ・柔軟性とともに

再び動き出したクリークの活動も少しづつ定着し、川床の定期設置や、行政、自治会、大学、団体、企業などとの活動の連携も広がってきました。今後は、街の水辺を市民や観光客が日常的に楽しめる拠点の整備についてもオープンな議論を進めていきたいと考えています。

気が付けば、活動を始めて9年が経ちました。正解がない「まちづくり」の活動ですが、私たちの場合は、「楽しみ」や「柔軟性」とともに成り立っているような気がしています。これからも、この地で脈々と息づいてきた、クリークとともにある暮らしの文化を、市民一人ひとりがその価値を実感できるよう、さまざまな人たちと協力し、楽しみながら活動を続けていきたいと考えています。

皆さまも佐賀市にお越しの際は、ぜひ街なかの水路（クリーク）に着目していただけたらと思います。

このたびは、数ある事例の中から、さがクリークネットの活動をまちづくり大賞にご選出いただき、心より感謝申し上げます。

これからも、全国それぞれの地域で特色豊かなまちづくり活動が展開され、ともに発展していけたら幸いです。

かわさき・やすひろ
1983年佐賀県生まれ、佐賀市育ち。大学卒業後、建設会社・建築設計事務所を経て、（株）川﨑空間研究所設立。建築設計と不動産に関する仕事を本業とする傍ら、まちづくりや歴史的建築物の活用保全など、地域の価値を向上させる活動にも取り組んでいる

まちづくり優秀賞

事業名　寿百家店プロジェクト

受賞団体　株式会社寿百家店 | 活動地域　福岡県北九州市八幡西区黒崎

田村誠一郎 | 株式会社寿百家店 取締役、株式会社タムタムデザイン 代表取締役、福岡県建築士会

暗い寿通りでポツンと営業するお店

2016年、北九州市八幡西区の黒崎という街に私が足しげく呑みに行くワインバーがありました。〈トランジット〉という名前で、カウンター席が5席ほどの小さなお店。

そのトランジットがある〈寿通り〉は黒崎駅から徒歩約7分ほどです。ちなみに黒崎駅は北九州市内で小倉に続く第二のエリアであり、駅前には戦後から人々の暮らしを支える商店街があり栄えてきましたが、年々人通りが減り、空き店舗が目立つようになっていました。

〈寿通り〉はその大きな商店街に挟まれた小さな通りで、当時は13店舗中、5店舗しか営業してない見事なシャッター商店街でした[写真1]。

そんな通りでひっそりと活動していたトランジットのオーナーが、福岡佐知子さん（以後、福岡さん）。普段はPR/広報の事業を生業としており、昼間はこの店を事務所に、夜はワインバーにして、おもしろい活用をしていました。

福岡さんは日々「この通りを元気にしたいのよね」と話し、そのまちづくりにかける想いは熱く、私と誕生日が2日しか違わない同い年だったこともあり意気投合。それがトランジットに通う理由でもありました。

暗い夜の通りの中で、このお店だけがふわっと明るく、福岡さんの人柄もあり、そこはまちの拠り所のような存在になっていました[写真2]。スペースが足りなくなりサテライトスペースをDIYでつくり、シャッターの2つ目をあけたり。

続いてお惣菜屋さんもオープン

トランジットの隣の空き店舗で福岡さんが次に展開したのはお惣菜屋さん。ここから私が実働に関わり始め、設計を担当しました。お惣菜屋さんは〈コトブキッチン〉と名付けられました。少しずつですが、隣店舗もお花屋さんが入居し、寿通りに変化の兆しを感じていました。福岡さんの勢いはここで止まらず、コトブキッチンの前の空き店舗に〈コトブキリビング〉というイベントスペースをつくりました。

関係人口を増やす「トムソーヤ大作戦」

こうして空き店舗の活用を広げていく間にも、福岡さんは落書きだらけだったシャッターにペンキを塗るワークショップを重ねて関係人口を増やしていきました。このシャッターを塗るワークショップは、「トムソーヤ大作戦」と名付けられ、オリジナルの手拭いを購入するとその収益がペンキ代に変わるという仕組みでした[写真3]。

2015年から2019年にかけて寿通りは少しずつですが福岡さんの地道な一歩一歩が実を結び、確実に明るくなっていきました。

あんドーナツ化計画へシェアハウス構想、始まる

私は1階の展開を後押しする形で2階を活用してシェアハウスをつくりたいなぁと常々福岡さんに話していました。

この背景にあったのが、2016年に弊社がリノベーション・オブ・ザ・イヤーでグランプリをいただいた〈アーケードハウス〉というプロジェクトです。「シャッター商店街」と「明りを灯す住宅」の共存関係を表現した手法ですがアーケードハウスは単一の住宅であり、シャッター商店街全体への波及効果としてはまだまだ弱さも感じていたので、シェアハウスにすれば商店と住まいの掛け算がより大きくなり、もっと多様性が生まれるのではないかと、アーケードハウスのいわゆるアップデート版をイメージしていました。

というのも、昭和後期から平成にかけて中心市街地から郊外のニュータウンに人口が移る

写真1　当時の寿通りの内部の様子。シャッターは落書きだらけで治安も良くなかった

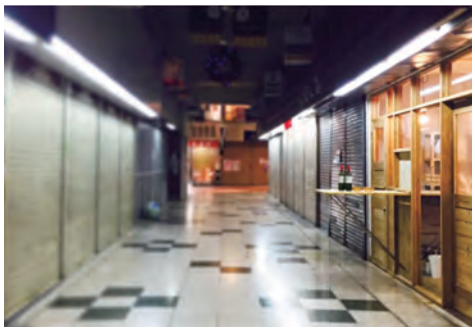


写真2　暗い寿通りでポツンとトランジットは営業していた

写真3　2018年ころ。トムソーヤ大作戦でシャッターを塗るワークショップの様子

ことで「ドーナツ化現象」と呼ばれる社会問題になり、黒崎でも2008年ころからの人口減少が中心市街地の商店街などの衰退に拍車をかけていました。これを逆転させる必要があると思い、私はまた中心市街地で人が暮らすことで中心の密度を上げ、街の活性化につなげることを目的とした「あんドーナツ化」と名づけた計画を地道に進めていました[図1]。

株式会社寿百家店の設立へ

商店街や寿通りの2階をシェアハウスにするにはたくさんの調整や資金、期間が必要になるので、福岡さんひとりでは難しいフェーズになります。「そろそろ私も本気で加わっていかなくては」と思っていました。私と福岡さんが発起人となって2020年、〈株式会社寿百家店〉を設立しました。建築不動産の先輩、地元の大学教授やまちづくりの先輩、マーケットから研究する都市計画家など心強い仲間4人を含めて6人が取締役という構成です。

社会課題を抱えるまちをリデザイン

法人名〈株式会社寿百家店〉は駅前の百貨店の閉鎖が由来になっています。設立の前年、2019年に黒崎駅に隣接する百貨店〈黒崎メイト(黒崎井筒屋)〉が61年の営業を終え閉館しました。全国的な百貨店閉館の流れは、北九州でも顕著に表れています。

寿百家店プロジェクトでは、百貨店内の旧来の専門店を路面店に置き換え、〝専門店〟は地域の人々が持つ技術やセンスを活かした〝地域の専門店〟に変え、その2階に人が住まい、「商いとともに暮らす」という、昭和40年代の商店街の在り方を描きました。そんな社会課題が溢れる街をリデザインするコンセプトが〝寿百家店〟の名前の由来となっています。ちなみに閉館した黒崎メイトは2024年2月現在も手つかずの巨大な空きビルのままになっています。

会社設立後、新たな区画のリノベーションへ

こうして2020年5月に株式会社寿百家店を設立。この頃には寿通り内に自然と美容室や洋服屋さん、ギャラリーが入居してくるようになり、今までの活動の波及効果が現実に表れてきました[図2]。こうした変化ってほんっと嬉しい。

そんな流れのなか、寿百家店が次に目を付けたのは図2の黄色の3区画。ここを一気に開けてしまおう! という計画です。木造2階建ての長屋で、1階は旧洋服店、旧呉服店、旧宝石店の3店舗が入っていました[写真4]。

この3区画を寿百家店のコンセプトに沿ってまちの専門店街にしようと考えました。シャッター1枚の幅は約1.2〜1.8m程度であり、まずは旧婦人店と旧呉服店のシャッター1枚ごとに区画を分けて、合計9つの小さな区画をつくろうという案[図3]。マイクロショップの集積のようなイメージですね。

「店主一人ひとりが何かをつくれたり、技術を持っていたり、目利きをしていたりと個人の表現が発揮できる小さなお店が集まるとおもしろいんじゃないか」と福岡さんと想像していました。

そして、大きな通りに面した端の区画については、福岡さんと私とで飲食店を営むことにしました。

2014–2020年(含む予定)

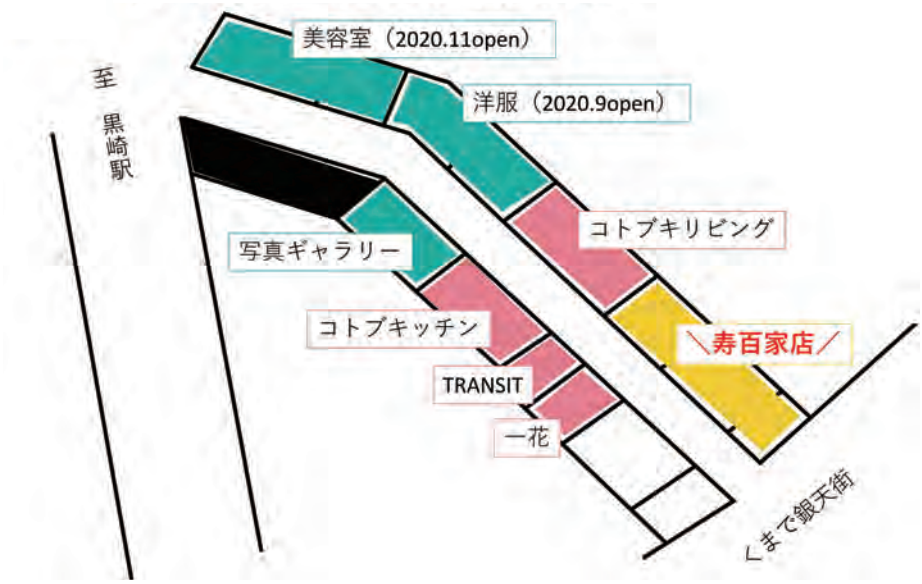
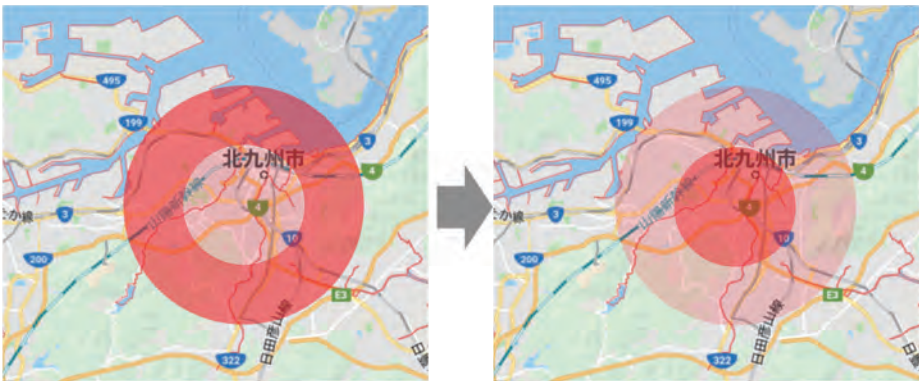


図2　2020年には新店舗が次々とオープンしました

写真4　beforeの外観



ドーナツ化現象　中心の人口密度が低い商店街など中心市街地の衰退。公共インフラの管理負担大など。

あんドーナツ化　中心の密度を高める楽しい案(美味しい餡)で多様性が生まれ中心市街地の活性化や公共インフラも効率化。

図1　ドーナツ化現象とあんドーナツ化の図

図3　シャッター1枚ごとにお店が入っているイメージ

図4　右側の角部屋にリビングと4つの洋室は商店街に明かりを灯す

家賃設定は周辺相場より少し高めですが、光熱費込み（条件あり）と小面積であることから、店子さんはチャレンジしやすい、なおかつ大家としては事業収支が成立しやすいという価格設定になっています。両者のイニシャルコストにかかるリスクを軽減することが狙いです。

「住む」と「活動する」が混ざり合うシェアハウス

続いて2階の計画へ。2階も下の店舗と同様に3区画に分かれており、かつては住宅として使われていました。

2階に住んでいただく住人は1階の店舗やイベントを手伝ってくれたりと「住まう×活動する」がリアルに回り、いろんなきっかけが生まれることをイメージしました。

間取りは角部屋を住人が集まる共有リビングにし、アーケード側には6畳の部屋を4つ配置したことで、夜には商店街に明かりが灯ります［図4］。廊下側にトイレや洗面、お風呂などの共有部分を配置し、4人が共同生活しやすいように設計しました。

コロナ禍の逆境で仲間を増やす〈寿マーケット〉や多様なイベント

計画も準備も整い、正式にリリースを！という段階でしたが、2020年5月、みなさんもご存じの通りコロナ禍に突入……。入居者募集を呼びかけるために三密回避が叫ばれる中でオンラインによるローンチイベントを開催しました。その甲斐もあり即日の入居希望者も現れました。

この勢いにのって次にしかけたのは「マーケット」です。寿百家店の仲間には都市計画家でありマーケットの実践者でもある加藤寛之さんもいるので、日程や進め方、集客方法など加藤さんに教わりながら、そしてコロナ禍の緊急事態宣言に怯えながら（笑）開催していきました［写真5］。

商店街は屋外でもあり屋内でもある、両方のメリットを生かせる特別な立地なのだということ。コロナ禍なのでさすがに集客は思うように伸びなかったのですが、毎月開催することでちょっと

写真5　寿マーケットの様子

写真6　壁つくりワークショップの様子

写真7　アパレルショップ

写真8　古本店

写真9　寿通りの日常

写真10　2階シェアハウスの共有リビング

ずつ認知が広がり、地域の人々の反応もよくなっていきました。

こうしてなんとか寿通りの発信もしつつ、入居者を募りつつ、内部では工事も進めていきました。難しい工事はプロに頼みながら、「壁をつくるワークショップ」[写真6]をはじめ大小さまざまな企画を開催し、関係人口を増やしていきました。

直営の飲食店〈あんとめん〉がオープン

無事に工事も進み、角の区画は直営の飲食店にすることにしました。福岡さんが人形焼きで私がラーメン屋さんを提供するので〈あんとめん〉という店名に。人形焼きは昔、黒崎にあった「モダン焼き」という文化を意識したものです。ラーメンは寿百家店の仲間でもある青木純さんが東京の雑司ヶ谷で展開する「都電らーめん」のおいしさに衝撃を受けて、それを黒崎でローカライズして提供したかったのです。

寿通りに新たな顔ぶれが揃う

2020年5月からあらゆる企画と実践を重ねてきました。仲間集め、資金調達、コロナ禍との戦いを経て完成した1階の店舗にはエステサロンやアパレルショップ、古本店、雑貨屋などの店舗が入居してくれました[写真7〜9]。2階のシェアハウスには20〜30代の男女4人が入居してくれて、満室となりました[写真10]。

少しづつ変化しながら、前に進む寿通り

現在では寿マーケットもシェアハウスの若い住人が受付を担ってくれたり、自らのイラストを作品として出店してくれたり、多世代の交流やチャレンジの場にもなっています[写真11]。もう彼ら彼女らの時代に入っていきますね。

まちづくりにゴールはありません。一見成功しているかのようですが、今でも日々、微調整を繰り返す手探り状態。ずっと将棋を指しながら、次の一手を考えている感覚です。

写真11　2023年7月の寿マーケット。福岡さん(中央)と出店したり手伝ってくれているシェアハウスの若者たち

シェアハウスは退去もあれば入居もあり、その都度、いろんな人生のドラマが生まれています。こうやって一喜一憂することも〝まちで暮らす〟醍醐味であり、今の時代の賑わいや活性化を形づくるひとつの要素なんだろうと思います。

たむら・せいいちろう
1978年生まれ。北九州市在住。地方都市のドーナツ化現象を〝あんドーナツ化〟にかえるべく活動中。2021年テレビ東京「ガイアの夜明け」出演。2022年リノベーション・オブ・ザ・イヤー殿堂入り等

まちづくり優秀賞

事業名　明治の赤レンガ製茶工場遺構が解体危機を乗り越え、菊川のまちづくりの拠点へ

受賞団体　NPO法人菊川まちいき | 活動地域　静岡県菊川市

大橋隆夫 | NPO法人菊川まちいき 会長、建築士

赤レンガ倉庫保存に至る概要

2012（平成24）年3月、当NPO法人「菊川まちいき」が静岡県菊川市堀之内1425にある赤レンガ倉庫［写真1］の隣接民有地を買い取り、赤レンガ倉庫底地（市有地）と交換することにより、「道路敷」にあるからと取り壊しを迫られていた倉庫の保存が正式に決まった。1985（昭和60）年5月「菊川町駅南土地区画整理事業」の基本計画が決定してから28年の月日が流れての保存決定である。

しかし保存会、所有者は多大なる負担を抱えることとなった。隣地を買い取るため保存会有志により当法人を結成して、2011（平成23）年に隣地を買い取ったのである（約1,400万円、会員が毎月1万円を出し10年計画で返済、その後完納）。その間、「区画整理の完了が遅れる」「レンガ倉庫に価値はない」などさまざまな圧力

写真1　保存された赤レンガ倉庫全景

があったが、保存活動メンバー、赤レンガ倉庫所有者、賛同する多くの市民、隣接地所有者の協力により、赤レンガ倉庫は保存が決定した。

10年にわたる保存活動であったが、ここに至るまでには多くの物語があった。

保存活動

区画整理の当初の計画では、1982～1984（昭和57～59）年に区画整理ワークショップを重ね、赤レンガ倉庫を駅前本通り商店街のシンボル的な建物として位置付け、街角広場の一角に配することが計画されていた。しかし区画整理終盤になり、2004（平成16）年6月「町としては利用計画が明確でない中での保存は難しい。」と方針転換を言い渡された。加えて2007（平成19）年9月には行政より保存会に対し「これが最後の説明会」との通知があり、「赤レンガ倉庫が建っている敷地は区画整理では道路敷きとして申請されている、保存に要する費用の確保も無理である。古い建物であるが文化的歴史的な価値は認められない。取り壊し後は残ったレンガで花壇やトイレをつくってはどうか。」などの提案の説明があった。

そこから保存を願う市民の本格的な保存活動が始まった。

2008（平成20）年から署名活動を始め、レンガ倉庫を市民に知ってもらう活動を積極的に進めた。集めた保存要望署名は5,000名を超えた。

また『噂の東京マガジン』のテレビの取材を受け、テレビ放映を機に全国にその存在を知らしめることとなった［写真2］。放映を見た研究者より早速学術調査の申し込みがあり、大学生が加わっての大掛かりな調査が行われた。

専門家の学術的見地によると、

「赤レンガ倉庫は、静岡茶業が隆盛を誇った明治中期に建てられたものと推定される（後に1900（明治33）年と判明）。新しい時代に見られる木造や鉄骨造を基本とした構造のレンガ造ではなく、レンガのみで構成されるもので、窓周りの意匠、基礎の束までレンガの使用が認められており、再現することが容易でないものである。デザイン、構造、規模など、菊川市のみならず、静岡県内でも例のない歴史的建造物である。

1889（明治22）年に東海道線堀之内駅（JR菊川駅）ができ、1892（明治25）年に駅南一帯にお茶の再製工場（富士製茶会社）ができた。その工場の一部であったと推定される。ひとつには、倉庫内の構造物を調べると、床や天井の痕跡からこの場所で合組（お茶のブレンド）を行っていたことが推測され、単なる倉庫ではない。」

「お茶の季節になると機械が廻り煙突から煙が立ち昇り、近隣から集められた荒茶を再製し箱詰めにして、貨車に積んで清水港からアメリカに輸出されていた。茶産業はもとより木工、紙業等の茶関連の商業も発展し街が形成され、言わば菊川市の発展のルーツである。」

との見解に、私たちは改めて赤レンガ倉庫の価値を見直し、保存の意義と必要性を実感した。

この調査が基となり、2010（平成22）年には国登録有形文化財の認定を受けている。

2008（平成20）年以降に集めた保存要望署名は5,000名を超え、多くの文化人やマスコミの方からも保存推進の意見をいただいた。保存会は、地域のコミュニティ発信、文化活動等、まちづくりの実践も積み上げてきたことから、市議会と協議の場が持たれ全員協議会におい

写真2　『噂の東京マガジン』取材風景

写真3　赤レンガ倉庫の保存活動を伝える看板

て、保存会および「菊川まちなかいきいき倶楽部」として保存の意義を主張し、実践の報告や今後の活動方針を発表し、純粋に住民ボランティアからなる文化活動であり、まちづくりの活動であることをアピールした[写真3]。

その後、行政と保存について何回か交渉を持ったが、解体と保存の平行線で推移して、保存問題は行政と保存会、所有者と膠着状態であった。この頃になるとマスコミの論調も「市民が純粋にまちづくり活動としてレンガ倉庫の利用方法も提案し実践している。前向きに残すべきとだ」と新聞に取り上げられ始め、このまま世論を無視して解体に突き進むことは難しくなった。

この膠着状態を解決するために、2009（平成21）年11月、市議会の全員協議会が開かれた。協議の内容は、大多数の議員の意見が「残せるものならば、残す方向で考えましょう」であり、全員協議会の結論であった。

これを受け、残すための委員会をつくり、残せる案2案を作成し、2010（平成22）年7月全員協議会で議論され、2案併記で行政と保存会に示すという結論であった。

[1案] 赤レンガ倉庫の底地を、市の責任において、普通財産に変更し残す方法。

[2案] 赤レンガ倉庫に近接する土地を民間により確保し、レンガ倉庫の底地と換地交換し、底地が宅地となり保存可能となる。

上記2案を受け行政と協議をしてきたが、行政は1案での解決は拒否した。保存会、所有者は多大なる負担を抱えるが前向きにとらえ、2案「民間で隣地を所有する方法」を選んだ。

隣地を買い取るため保存会有志により

写真4　煉瓦de落語

写真5　絵画展

写真7　子ども写真大学

「NPO法人菊川まちいき倶楽部」を結成して2011（平成23）年に隣地を買い取ることができた。そして2012（平成24）年3月に正式に換地手続きが終わり、赤レンガ倉庫は正式に保存が決定した。

NPO法人まちいき活動

その後、当法人は菊川市のランドマークとして、菊川らしさを忘れることなく活動を進めている。例記すれば、茶の文化の発信（歴史展示、蘭字勉強会、講演会）、有名作家作品展（写真・絵画）、レンガ積み勉強会、健康講座、防災講座、街並みゼミ参画、手づくり和展、音楽コンサート、落語会、おはなし会、朗読会、夜店市、フリーマーケットなど地域行事への参加等々、多種多様である［写真4〜7］。

今後の展望

今後重点を置く内容として、次代を担う子どもたちへの活動の展開である。まちづくりに関心のある高校生・大学生の参加交流も始まっている。

また、新しいレンガ倉庫の活用として、高校生がレンガ倉庫の外壁を使ってプロジェクションマッピングを行い、見事な映像を見せてくれた。

近隣の小学生の社会科見学の申し込みも増えてきた。菊川の茶文化歴史を熱心に聞く様子に今後の活動が見えてきた。

そして、時を経て現在では、行政からの地域活動支援1%交付金の支援を受け、レンガ倉庫の歴史をまとめた37分のビデオ映像を作成し、まちづくりに活用している。

今後も構成メンバーの特性を生かし活動を継続していけそうである（建築士、商店経営者、医師、子育て支援者、技師、まちづくりコーディネーター等々）。

これからも街のランドマーク、文化の発信拠点として「NPO法人菊川まちいき」が保存、利活用していきますので、御支援、御協力のほどよろしくお願いします。

写真6　中学生クリスマスコンサート

おおはし・たかお
1947年菊川生まれ。大学で建築を学び建築事務所勤務後、1976年菊川に建築士事務所開設。ライフワークとしてまちづくり活動をする。2009年NPO法人菊川まちいきクラブを結成し理事長就任。現在は赤レンガ倉庫を拠点として、まちづくり活動を継続中

まちづくり奨励賞

事業名　三輪山をシンボルとする桜井地区のエリアマネジメント

受賞団体　都市再生推進法人 桜井まちづくり株式会社
桜井市本町通・周辺まちづくり協議会

活動地域　奈良県桜井市

岡本 健 | 都市再生推進法人 桜井まちづくり株式会社 代表取締役、桜井市本町通・周辺まちづくり協議会 会長
中尾七隆 | 都市再生推進法人 桜井まちづくり株式会社 取締役、奈良県建築士会 桜井支部長

岡本

中尾

飛鳥時代前の三輪山麓「ヤマト」

実在性が高い初代の天皇は、第10代崇神天皇と謂れ、ご神体「三輪山」[写真1]の山麓でヤマト政権の基盤をつくったとされている。私たちは、この地の歴史的文化遺産、良好な自然や景観、良質木材等の地域資源の掘り起こしと活用による持続可能なまちづくりをめざし、活動を継続してきた[表1]。

主な成果と今後の課題・必要性

第1期

[1998〜2003年] 三輪山をシンボルとし、地域資源を掘り起こしながら活用することで、次世代まで元気で誇れるまちであり続けるよう、まずは奈良県建築士会と青年会議所メンバーが先導し、市民主体のまちづくり手法を学ぶファシリテーター養成講座を兼ね「まち歩きワークショップ（以降WS）による『桜井駅から三輪へ通じる手づくり誘導マップ』を作成・配布・活用する」ことから始めた。そして、1999年皇太子さま（現、天皇陛下）ご成婚記念事業「三輪山麓の金屋河川敷公園整備事業」（奈良県主催）のオープニングセレモニーにて、このマップを使って万葉集歌碑めぐりクイズラリーを実施したことがきっかけで、集客目的の商工まつりから歴史・景観を活かした市民主体イベント「大和さくらい万葉まつり」[写真2]へと変革できた。

以降、まつりに関与した仲間（官・学・金・民・建築士）のネットワークが構築され、ともに今日までの24年間、不思議な出会い、多くの方々のつながりやサポートのおかげで、来訪者増・若者の雇用増・新規事業者増と移住・定住増につながる持続可能性のあるまちづくりへと、より良い方向に向かっている。

表1　今までの活動概要

地域資源	御神体（三輪山）…日本最古大神神社、酒の神、赤い糸伝説の三輪、元伊勢桧原神社 • 日本発祥…酒（杉玉）、仏教伝来、芸能、市（つば市）、相撲、競馬、そうめん他 • 鎮守の森…三輪山周辺の市内各字に残る130カ所の杜（樹木、建造物、伝承等） • 万葉歌碑…日本最古の道「山の辺の道」周辺で詠われた万葉集と大和平野の風景 • 伊勢街道…歴史的建造物の残存率が高い「三輪・桜井・初瀬」の町並み • 良質木材…吉野スギ・ヒノキの製材（酒樽〜鉄道用材〜建築用材）で栄えたまち
活動目的	公民が連携し地権者とともに三輪山をシンボルとする地域資源（歴史的文化遺産・良好な自然や景観・良質木材等）を掘り起し、活用することで「来訪者・雇用・移住・定住」増と持続可能なまちづくりをめざす **主なターゲット** 癒しと縁を求めてくる都会のOL 全国の歴史・考古学ファン 歴史的建造物や地域木造建築に興味ある学生 地権者（空家・空地所有者、市、交通事業者）

	期間	主な事業（活動）内容	主な連携体 会	官	学	金	民
24年間の活動プロセスと連携体制	**第1期** 前半 1998−1999 桜井地域〜三輪地域	**まちづくり道具を持ちファシリテーター養成** 桜井駅から山の辺の道起点（つば市）につながる誘導マップを市民参加によるまち歩きにより作成し、県主催の河川（大和川源流）敷公園オープニングセレモニーにて配布する	◎ JC 士	○ 県	△ 小	△	△ 一
	後半 2000−2003 桜井〜宇陀	**歴史・景観を活かしたイベントに変革** 27年目となる商工まつり（桜井万葉まつり）から歴史・景観を活かした市民主体のまつり大和さくらい万葉まつりに場所を変え開催	◎ 実	○ 市	○ 奈	○ や	△ 自
	第2期 2002−現在 市内全域〜市周辺地域 (2006)	**地域資源（鎮守の杜）の掘り起こし** • 市内各字の鎮守の杜（神社）130カ所を市教育委員会と自治会協力により4カ月で調査 • 鎮守の杜を大切にするため学識経験者等有志で「森とふれあう市民の会」を発足し、調査報告書「桜井の自然」発行、鎮守の杜のルート探索75回、子供と体験学習18回開催 • 三輪地域の景観計画策定推進事業（まち歩き、デザインコードづくり、利活用提案等）	◎ 士 森 森 三	○ 市 市 県 小	○ 畿 近 小 畿 奈		△ 自 一 一 自
	第3期 2009−2015 三輪区域 桜井区域 2010− (2011) (2013) (2014)	**町家市場の開拓拡大（国の助成事業に応募）** • 建設業と地域の元気回復事業 →太陽光・吉野材を活用した町家拠点設置 • 建設企業の連携によるフロンティア事業 →吉野材・町家体験ツアー、展示相談会等 • 地域木造住宅市場活性化推進事業 →新町家と改修町家のモデルハウス設置PR • 奈良県町家等地域資源発掘発信事業 →桜井市本町通周辺まちづくり協議会発足 • 本町通沿いの建物悉皆調査（町家残存把握） • 地域商店街活性化事業 →商店街のアーケード撤去し防犯灯等整備 • ソラ本町フェスタ9回開催し終了（10年間） • 文化遺産を活用した地域活性化事業 →桜井区内の建物悉皆調査 （町家分布状況、まちあるきマップ・まちなみガイド作成）	◎ 協 協 三 三 商 士 協 商 実 協	○ 国 国 国 県 経 市 文	○ 畿 畿 畿 奈 高 大 摂	△ 一 や 一 や や や	△ 一 一 一 自 自 自
	第4期 2015−現在 (2016) (2017) (2018) (2021) 現在	**公民連携によるエリアマネジメント事業推進** • 将来ビジョンを作成し市長へ提言 • 都市再生推進法人桜井まちづくり（株）設立 • 空町家・空店舗利活用3件パッケージ化 （町家カフェ＋銀行跡レストラン＋高級町宿） • 景観づくりの手引書（案）作成 • ふるさと納税返戻品業務を商工会より受託 （2017年568万円→2023年22,900万円） • 桜井駅前ヒロバ整備活性化構想（国交省） • 登録有形文化財2件答申、記念誌発行 • 桜井駅前ヒロバ再整備に向け社会実験中	◎ 協 協 ま 士 ま 商 ま 士 ま	○ 市 市 国 MT 市 市 連 文 連	○ 大 摂 大 大 華 大	○ 南 や	△ 区 区 地 区 区 地 区

◎主催・共催・委託　○協賛・出資・研究　△協力・参加　**会**（JC…青年会議所 士…建築士会 実…実行委員会 森…森とふれあう市民の会 協…まちづくり協議会 三…NPO法人三輪座 ま…桜井まちづくり株式会社 商…商店街）　**官**（県…奈良県 国…国土交通省 経…経済産業省 文…文化庁 市…桜井市 MT…MINTO機構 連…国、県と市の連携協定）　**学**（奈…奈良県立大学 畿…畿央大学 大…大阪工業大学 摂…摂南大学 華…京都華頂大学 近…近畿大学 小…桜井市内小学校 高…県立奈良商業高校）　**金**（南…南都銀行 や…大和信用金庫）　**民**（自…自治会 区…桜井区 一…一般市民・関係市民 地…地権者）

写真1　箸墓古墳（左上）と三輪山（右上）

写真2　2001万葉まつり（遣隋使再来の場面）

写真3　談山神社講堂

写真4　桜井の自然

桜井市広域観光案内デジタルマップのQRコードはこちら

図1　デジタルマップ

第2期

[2002年～] 万葉まつりに関わった有志メンバーが事務局役となり、考古学者、小学校教諭、市文化財職員、郷土史家等とともに森とふれあう市民の会を発足。調査・ルート探索・子供たちと神社のある森で学習 [写真3] 等、24年間活動してきたことで、残すべき巨樹や珍樹を報告書 [写真4] にまとめ明確にし、重要樹木の把握と保存につながった。

また、歴史的文化遺産・ビューポイント等を発見・再発見してきたことから、桜井100選として観光案内できる要素の抽出につながり、昨年、大阪関西万博を見据えた広域観光デジタルマップ [図1] ができ、駅前で案内している。

[2005～2006年] 県景観部局と奈良まちづくりセンターの協働事業のために、森とふれあう市民の会有志と三輪地区の事業者（みむろ杉の今西酒造、みむろ最中の白玉屋栄壽、旭日鉄工所）と住民有志が主体となりNPO法人三輪座を発足し、畿央大学三井田研究室と三輪小学校の参加協力により、まち歩きWS・調査・研究・提案等を「三輪まち歩きときめきマップ」としてまとめ、住民に配布したことで、三輪地域をモデルとした景観まちづくりに関する知識・技術が構築され、桜井市景観ガイドラインにつながった。

第3期

[2009年～] 町家市場の開拓拡大につながる事業が国土交通省助成事業に採択されたことで、町家や空き店舗利活用のモデルができ、以降10年余りでカフェ2件・宿2件・レストラン1件・酒蔵改修1件・地域型木造住宅（町家含む）複数が竣工。ヘリテージマネージャー（HM）が多く関与し、来訪者や雇用増となった。

[2011年～現在] 空き店舗を活用しまちづくり協議会とまちづくり会社の活動拠点「たまり場」を設け、いろいろなコミュニティ活動（つながりカフェ130回以上、毎月名画座、年数回のいきいき講座）をしていることで、周辺住民の参加が増えた。また、商店街のアーケード撤去 [写真5] を行い、「ソラほんまちフェスタ」という懐かしく想える夜店を開催したことで、来場者約5,000人/日あり、周辺からの親子連れの来訪者が期待できるとわかり、空き店舗への新規店舗を誘致するうえで参考となった（昨年で終了）。

[2014～2015年] 桜井市副市長を座長とする横断的な「桜井駅南口エリア（周辺）のまちづくり検討会」を発足し、5年先を見据え「2020桜井駅南口エリア将来ビジョン」を立て市長へ提言したことで、駅前ビル（エルト桜井）2階の空きスペースに屋内の遊び場「ひみっこパーク」を誘致でき、親子連れ・園児など来訪者増となっている（3年半で20万人来訪達成）。

写真5　商店街のアーケード撤去前（上）と撤去後（下）

写真6（上）　材木商邸冨田邸
写真7（下）　旧吉野銀行

写真8　旧井田青果店の改修前（上）と改修2回後（下）

第4期

[2015年～] 大阪工業大学から地元建設会社にインターンシップ生として来社した学生が、当地区での空き家利活用の提案を卒業研究のテーマにし取り組んだことがきっかけで、同大学林田研究室と摂南大学小林研究室により桜井区内約1,300件の建物悉皆調査が実施された。そして、空き町家2件（青果店と材木商邸宅）と空き店舗1件（元銀行）の内部実測調査と利活用提案がなされ、桜井まちづくり（株）が国土交通省とMINTO機構の助成と地元信用金庫の融資を受け、奈良県建築士会桜井支部HM4名により建物を改修できた。

そして、2021年3月に冨田邸（材木商邸宅の宿）[写真6] と旧吉野銀行桜井支店（銀行跡レストラン）[写真7] を登録有形文化財に答申後、記念誌を発行し市図書館に蔵書していただいたことで後世に近代建築の記録を残せた。

旧井田青果店を改修した櫻町珈琲店 [写真8] は確認申請不要の既存不適格な空き町家であったが、構造過半以下の耐震改修と防火改修の解釈の相違で疑義が発生し、木製建具の外部面に防火シャッターと防火サッシ等防火対策面の再改修を行った。この指摘を活かし、防災予防につながる未指定の歴史的建造物の利活用改修を推進するためには、建築基準法3条のその他条例を策定し、建物指定をすることが急務であり、行政・学識経験者・建築士の広域的な連携により京町家できること集のような県民と建築士にわかるガイドブックが必要である。

[2017～2019年] 奈良県建築士会桜井支部メンバーが参画して景観づくりの手引き書（案）を策定。結果、景観形成区域内に修景助成制度ができ、本町地区では、まちづくり会社代表の岡本が空き店舗であった旧辻本花店を購入しゲストハウス和櫻およびレンタルスペースザ・トリシクル輪に改修し、多くの来訪者の居場所となりマーケティングにも役立っている。

[2020年～現在] エルト桜井（駅前ビル）正面の外壁にガバメントクラウド型ファンドによりデジタルサイネージ「さくらビジョン」を設置したことで、改修を終えた4施設と周辺の地域資源のPRをし、ふるさと納税返戻品業務受託と合わせまちづくり会社の主な収入源となっている。ただし、役員は無報酬。

これからも

以上のまちづくりを通じて関わった学生等を地元の役所や事業所の雇用につなげ、関係いただいている有志の方々とともに、次世代まで元気なまちが持続するよう活動します。是非、三輪・桜井にお越しください。

おかもと・たけし
都市再生推進法人桜井まちづくり（株）代表取締役、桜井市本町通・周辺まちづくり協議会会長

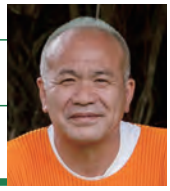
なかお・ななたか
都市再生推進法人桜井まちづくり（株）取締役、奈良県建築士会桜井支部長

まちづくり奨励賞

事業名　「伝泊+まーぐん広場」× 集落文化を中心にした「日常の観光化」によるまちづくり

受賞団体　一般社団法人しま・ひと・たから | 活動地域　鹿児島県奄美群島

山下保博 | 一般社団法人しま・ひと・たから 代表理事、株式会社アトリエ・天工人 代表取締役社長



はじめに

2021年7月世界自然遺産に登録された鹿児島県の奄美群島には、今なお手付かずの豊かな自然環境が残っています。それだけでなく、さまざまな歴史的背景の影響により約360の集落が750年以上残っており、方言や唄、踊りなどがそれぞれに少しずつ異なる独自の文化が今日まで継承されてきたことは、世界に誇るべき貴重な事例です。

その一方で、多くの集落では過疎化・高齢化が進み、高齢者の孤立や空き家が深刻な問題となっています。加えて、世界自然遺産の登録を目前に控える中で、国内外の富裕層によって安く土地が買い荒らされていくこと、オーバーツーリズムにより地域コミュニティや貴重な文化資源が壊されてゆく危険性を有しています。

こうした問題への対策として、奄美大島出身の建築家である山下保博は、4種類の宿泊施設「伝泊」や地域交流の場「まーぐん広場」の設計および運営をスタートしました。さらに、「しま(=集落)」ごとに異なる文化と、それを担ってきた「ひと」こそ「たから」であるとの想いから、地域住民と連携した集落文化体験プログラムを観光客へ提供するなどして、集落文化の継承や地元雇用の創出に取り組んでいます。こうした集落の「日常を観光化」するまちづくりを通して、奄美大島の集落を幸せにするまちづくりを推進しています。

観光×福祉×集落のまちづくり

「伝泊」は、「伝統的・伝説的な建築と集落文化を次の時代に伝える」をコンセプトとして、2016年にスタートしました。空き家を改修した「伝泊 古民家」は、観光客の滞在を通じて、伝統的な建築構法をもつ建物とその集落の文化を継承することをめざしており、すべての宿を違う集落に点在させることで、集落間との連携強化も図っています。

廃業していたスーパーマーケットを改修した「まーぐん広場」は、高齢者施設や伝統料理を提供する食堂、地元の商品や作品を扱う物産&ギャラリー、ホテル、郷土資料のライブラリーを複合した施設です。奄美の方言で「みんな一緒」を意味する「まーぐん」の言葉の通り、集落住民と観光客の両者が求める機能を複合していることで、両者の出会いの場となっています。「観光×福祉×集落のまちづくり」を実現する拠点として、学童保育や塾の実施、伝泊芸術祭、まーぐん音楽祭、有名シェフを交えた地元料理人のスクーリング、フリーマーケットの

写真1　島の「とき」と対話する宿「伝泊 古民家」

写真2　島の「自然」と対話し、自分自身に還る宿「伝泊 The Beachfront MIJORA」

写真4　伝統行事の「八月踊り」をはじめ、多彩な体験プログラムを提供

開催など、地域の声に耳を傾けた運営・企画に力を入れています。

2019年には、伝泊で唯一の新築の宿である「伝泊 The Beachfront MIJORA」が誕生しました。台風対策も兼ねた無機質なコンクリートの床や壁と、奄美の伝統建築「高倉」にインスパイアされた焼杉の屋根の組み合わせが特徴的で、無駄をそぎ落とした禅的空間で、自分自身を奥深く見つめなおす静謐なひとときを提供しています。

2024年2月現在、伝泊は、奄美大島・徳之島・加計呂麻島の3島で42棟52室の施設を展開しています。

未来へつむぎ、稼ぐ、まちづくり

2016年の設立時には2名の従業員でスタートしましたが、2023年には従業員が100名以上の企業に成長し、その75%が地元雇用となっています。この雇用を維持できているのは、高級リトリートヴィラ「伝泊 The Beachfront MIJORA」と付帯するフロント兼レストラン&バー「2waters」が会社の利益の7割以上を生み出しているためです。

また、この施設を中心として環境に配慮した取り組みに注力しており、アメニティのノンプラスチック化や定期的なビーチ清掃の実施、客室内のコンポストと自社農園を活用した循環の仕組みの構築、小風力発電と太陽光発電の活用に向けた実証実験などを行っています。こうした取り組みが評価され、2021年には国際的なエコラベル「グリーンキー」を2つ取得しました。

「伝泊+まーぐん広場」によるまちづくりの取り組みは、2020年度「第6回ジャパン・ツーリズム・アワード」において最優秀賞にあたる「国土交通大臣賞」と「UNWTO倫理賞」のW受賞に続き、2021年グッドデザイン金賞（経済産業大臣賞）、2022年第12回地域再生大賞優秀賞、2023年九州観光まちづくりAWARDS2023金賞の受賞を果たしました。国外においては2022年「LUXURY LIFE STYLE AWARDS 2022」において「Best Luxury Resort Architecture in Japan」を受賞するなど、海外での評価も高まりつつあります。

写真3　眼前に広がる空と海に向き合い、心の奥行きを整える

小さな声に寄り添った さまざまな取り組み

まちづくりを推進する上で、島内外企業・大学と連携したさまざまな取り組みを行っています。

奄美の伝統的な船を再編集し、宿泊客のアクティビティに活用した「伝泊 Catamaran」や、奄美の伝統工芸である「大島紬」をアップサイクルし、和室や浴室にまで設えた客室「Tsumugi Suite Villa」が代表的で、後継者不足解消と伝統技術の継承をめざしています。そのほか、障がい者支援施設の協力のもと地域固有の植物を活用したオリジナルCBD商品の開発や、アートを介した植物と器による商品開発および地域の小学校と連携したワークショップ、講演会・展覧会等を開催しています。

また、近年奄美の土地が徐々に高騰していることを受け、2023年4月から土地を守るための不動産事業もスタートしました。空き家・空き地の活用の提案をはじめ、店舗スタートアップに向けたプラットホーム整備をめざしています。

さらに、今後奄美大島北部の笠利町29集落の連携をより強固なものにするために、施設の拡充と大学・地元高校の協力のもと、歴史の見直しと各集落や人の特徴を活かした体験プログラムの構築および発信に着手しています。

集落を一つの単位として考え、各集落が多様性に満ちた豊かさを得るためのまちづくりを通して、集落のくらしの持続と活性を図り「誰一人、何一つ取り残さない社会の実現」をコンセプトにまちづくりを推進しています。

やました・やすひろ
1991年より素材・構造・構法の開発を得意とする建築家として活動。2016年からは故郷の奄美大島で、宿泊施設「伝泊+まーぐん広場」を中心としたまちづくり事業に注力している

まちづくり奨励賞

事業名　「まん中の町」明日も健やかな町へ3つの処方箋

受賞団体　中野町（なかのまち）を考える会 | 活動地域　静岡県浜松市中野町

堀内秀哲 | 中野町を考える会 事務局長、堀内建築工房 代表

自分が生まれ育ち、今も生活の場とする浜松市中野町（なかのまち）。2005年に「中野町を考える会」を結成し、町の課題に向き合う活動を継続してきた。貴重な文化財やあっと驚くお宝も持たぬ町だが、地域の個性を大切に磨き育て、持続可能な環境を整えることを目標とする。

町は時代や社会環境の変化とともに、ゆっくりと代謝しながら姿を変えて来た、まさに「生き物」だ。この町がいつまでも健康で活力に満ちているように、18年間の活動を町への処方箋になぞらえて3つの取り組みを紹介する。

中野町の紹介

浜松市の東端で、国道1号天竜川橋のたもとに位置する。江戸時代には東海道と天竜川が交差する交通の要衝で、渡船場の間の宿として賑わった。町名の「なかのまち」は江戸と京都のちょうど中間点であることに由来する。街道の松並木と町屋が連なる、風情ある町並みだったであろう。

天竜川上流は良質な木材産地で、材は筏で川を下り廻船で一大消費地の江戸へ運ばれた。明治22（1889）年の東海道線開通以降、当地は中継加工地となり20軒もの製材所が建ち並ぶ材木の町となる。大戦後の需要最盛期には、商人相手の旅館や料理屋、芝居小屋、銀行、商店が集積して栄華を極めた。

やがて輸入自由化により地域の木材産業は衰退する。近年は商店が消え、少子高齢化が進む。空家や空地が目立ち、街道沿いの景観が崩れて活力を失いつつある。

［処方箋1］

セピア色の写真でDNAを繋ぐ

現在の町内には歴史の記憶や街道風情の面影は乏しく、個性が感じられない町並みである。年長者が言う「昔は良かった」時代の風景を見てみたい、そんな発案から古い写真を集める活動を行った。住民から300点を超えるセピア色の写真が寄せられた。そこには木材が山積みされた製材所や、川面に筏、帆掛け舟、漁船が多数浮かぶ様子、4軒もあった銀行の立派な佇まいなど、賑わいあふれる町の様子が活き活きと写し出されていた。

これを基に「昔なつかしの写真展」を企画し、集まった写真を町民へ披露した。家族で写真に見入り、当時を懐かしく語る光景が多く見られた［写真1］。来場者から当時の町の様子を聞き取り、また古地図や古文書が提供されるなど、新たな歴史発見の機会となった。さらに写真を案内板に仕立て直して現地に設置した。中ノ町村役場、筏師の木賃宿が並ぶ横町通り、芝居小屋天竜座など、町内10カ所余りに上る。

案内板を紹介したガイドマップも作成し、町の歴史を身近に感じられるようにした。小学校の校外授業でこの案内板を捜して歩く「まち探検授業」を継続して行っている［写真2］。見慣れた町に眠る歴史を実体験から学び、子どもたちが中野町のDNAを引き継いでくれることを願う。また東海道を歩く来訪者に向けて、町をPRするツールともなっている。セピア色の写真は、町の記憶を未来へつなげる重要な役割を果たしている。

写真1　昔なつかしの写真展

写真2　まち探検授業

写真3　橋詰ポケットパーク

写真5　伊豆石の蔵「まっし蔵」

写真6　ひとり芝居

[処方箋2]

暮らしやすい環境を自ら創る

2006年から町の中心を貫く国道1号を拡幅し、天竜川に新橋を架ける大工事が行われた。立ち退きにより沿線の人家や商店が消え、私たちの町は通過交通の高架橋の陰に埋没する危機に直面した。

国道建設工事はすでに進行していたが、地元の生活環境がより良くなるよう、周辺整備に関して会から国へ要望を行った。国交省は真摯に受け止め、住民とのワークショップ（WS）の場を設けることになった。会が地域住民の声を集約し、建築士が図案化して、WSで国・県・市と膝を突き合わせ具体的な整備内容を練り上げた。足掛け2年にわたる取り組みは、住民の努力と行政の前向きな姿勢により、大変充実したものとなった。

成果として、道路周辺の余剰地にこの町らしい3つのポケットパークや花壇が実現した。橋詰には対岸からの来訪者へのウエルカム公園を整備し、松を植え町の案内マップやベンチ・パーゴラを設置した[写真3]。小学校近くの広場には児童とともに桜を植樹した。小さな桜の苗木は、十数年の時を経て、今では花見を楽しめる立派な桜並木となっている。また町の中心にあるIC周辺は大規模花壇を設け、四季折々の花が往来の人々を楽しませている。「中ノ町フラワーロード」と名付けた花壇は、毎年小学生とともに管理をしている[写真4]。作業と同時に道路建設前後の町の変化を紹介して、活動の意義やまちづくりを実体験する場となっている。

[処方箋3]

伊豆石の蔵の今に活かす

町内には明治から大正時代にかけて建てられた石蔵が今も残る[写真5]。かつて木材を江戸へ運んだ廻船が、帰路に伊豆で石材を積み帰った。地産木材の対価として、伊豆石の蔵がこの地に建てられた。家主の生業は、製材業や薪炭業、醸造業などと多様で、それぞれの物語を秘めた建築物である。これは中野町が天竜川流域で担った役割と、伊豆や江戸との交易、文化の交流を伝える重要な歴史資源である。6棟の伊豆石の蔵は2017年に「浜松地域遺産」認定を受け、その価値を地域で共有することになった。

1棟の所有者から協力を得て、空地に残された石蔵の保存利活用に取り組んだ。片付けや改修作業は、ボランティアを募って実施した。参加した高校生により「まっし蔵」と命名された蔵は、地域の交流拠点へ再生された。これまでに流木アート展、ひとり芝居、落語会、ボサノバコンサート、古着物交換会、蔵フェスなどの会場となっている[写真6]。近年には木工作家の作品展を開催した。「材木のまちから木工のまちへ」をテーマに、町内の空家へ木工作家の移住を誘導し、新たな展開を画策中である。

伊豆石に関する取り組みは、その後静岡県建築士会の「伊豆石の蔵調査」へ繋がり、県西部に130棟以上の建造物を確認した。県東部では「伊豆石文化探究会」が発足し、その文化的価値を再評価する取り組みをする。伊豆石の建造物は県内に広がり、それぞれの歴史文化と密接に関連する。各地が連携して、伊豆石文化の「静岡遺産」認定をめざす動きに発展している。

これからもさまざまな目に見えない力によって、町はゆっくりと変化して行くだろう。私たちは注意深く観察し、明日も健やかな中野町であるように、建築士として手立てを処方していきたい。

全国各地のまちづくり同志たちの活動が、小さくとも一つひとつが重なり合って、豊かな明日のまちをつくる大きな力となっていくことを願う。

写真4　中ノ町フラワーロード

ほりうち・ひでのり
（公社）静岡県建築士会西部ブロックまちづくり委員。日本都市計画家協会会員。静岡県文化財建造物監理士（ヘリテージマネージャー）。浜松市景観審議会委員。浜松市歴史的風致維持向上協議会副会長

まちづくり奨励賞

事業名　塩竈の歴史と文化を活かしたまちづくり

受賞団体　特定非営利活動法人NPOみなとしほがま | 活動地域　宮城県塩竈市

大和田庄治 | NPOみなとしほがま 事務局長

まちの活性化への芽生え

塩竈市は人口約53,000人、仙台市と日本三景で知られる松島との中間に位置しています。奥州一の宮鹽竈神社の門前町として、また港町として栄えてきました。古くは、陸奥の国府多賀城や仙台藩の港として、明治以降は国内有数の港湾都市として、近代になってからは近海・遠洋漁業の基地として発展してきましたが、近年は基幹産業や商店街の衰退など、まちの活気が失われてきていました。

2004年私たちは、埋もれた地域資源を発掘し、情報発信を行いながら、まちの活性化をめざす有志により発足しました。

埋もれた資源の発掘と情報発信

江戸時代の地誌『奥塩地名集』を読み解き、実際の記された場所をめぐり、当時の姿を肌で感じ、その感動を市内外の方に伝えようと、勉強会やまちあるきを行い、ガイド養成講座を開催、各種団体等からの要請に応じて、名勝や旧跡、埋もれていた数々の資源の紹介をしています[写真1]。また、毎月、テーマを絞ったまち歩き会を開催し、毎回20名を超す参加者から好評を得ています。

さらに、この地誌を現代語訳した解説書を出版、江戸時代の塩竈の歴史文化を伝えるバイブルともなっています。これ以降、歴史や文化、産業に関するものや東日本大震災の記憶と記録を後生に残すための写真集等、これまでに約10冊以上の自費出版を行ない、小中学校生にも提供し未来を担う子どもたちにも歴史文化を伝えています。また、専門家や全国のまちづくりに取り組む方々をお呼びし、情報発信とまちづくりに関する勉強を重ねています。

藩政時代を物語る——勝画楼の保存

仙台藩が鹽竈神社別当法蓮寺の書院として享保年間（1716～1735）に建築したとされる勝画楼と呼ばれる建物が残っています[写真2]。この建物は、仙台藩主が鹽竈神社御参拝の折、休息所として使用しましたが、1871年の廃仏希釈で、法蓮寺や12の脇院は解体されました。しかし、勝画楼は書院ということで解体を免れ1876年の明治天皇東北御巡行の際には御在所となり、昭和30年代までは料亭として使用され、松平定信や大久保利通、谷文晁や与謝野鉄幹などの政治家や文人墨客が数多く訪れ、また、市民の遊興の場所として親しまれましたが、空家となっていました。2004年周辺は雑草雑木で覆われ、当時の面影を見ることもできませんでした。女性団体とともに草刈りを実施したところ、幕末に未完に終わった常夜灯の台座が出現し、忘れ去られていた遺構を発見しました。また、耐震補強や修繕を行なうとともに、お茶会やお月見会等を開催し、勝画楼を広く紹介する機会を設けましたが、諸事情により撤退しました。

その12年後の2016年老朽化による正式な解体が発表されましたが、署名活動等を展開、その成果がみのり、一転塩竈市に無償譲渡され、伊達文化を物語る歴史的値価値を持った文化財として市有形文化財に指定されました。署名活動の際には、過去に行なった私たちの活動が勝画楼の歴史的価値を知るきっかけになったとのお話や、専門家の方からは、当時行なった耐震補強が大震災時に倒壊しなかった要因との報告があり、活動の励みとなっています。

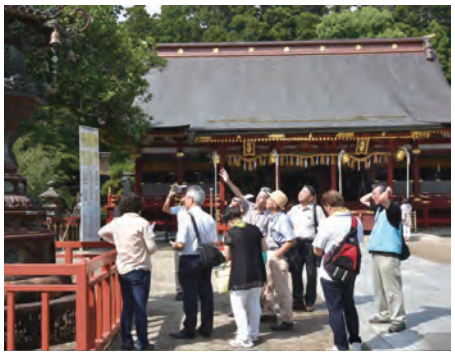


写真1　週末鹽竈神社をガイド

写真2　仙台藩主が、この場所から観た眺望が「画（え）にも勝る」ということから名付けられた勝画楼と常夜灯の台座

写真3　塩釜港の繁栄を象徴する亀井邸

写真5　旧えびや旅館（修復後）。2022年まちなみ景観に配慮して、協賛金を募り正面にあった電柱を移設

塩竈の魅力を発信する
――海商の館「亀井邸」

2003年勝画楼の活動の一方、塩竈発祥の総合商社カメイの初代社長宅の解体を1週間前に知りました［写真3］。私たちは所有者へ建物調査をお願いし、市教育委員会と共同で調査を実施しました。専門家の方々からは、塩釜港の繁栄を象徴し、近代産業の歴史を物語る貴重な建物であり、明治から大正期に建築された和洋併置式住宅であることが確認され、一時解体中止のお願いとともに、活用策を探りました。

2006年全国都市再生モデル調査に採択され、建物を活用していくためのお掃除会や車座会議を開催、まちづくりの人材育成や市民団体のネットワークづくり、食を生かしたイベントや源氏物語の主人公のモデルの一人である源融を通じた京都との繋がりのシンポジウムを開催。この活動をきっかけに、商工会議所が源融ゆかりの地を巡る観光コースの開発や、京都市下京区との市民レベルでの交流を行うなど、市全体でのまちづくりの動きが起こりました。また、子どもたちにもわかりやすく塩竈の歴史を伝えるビデオ制作や日本三奇のお釜神社等に案内板を設置しました。

これらの活動が実り、2007年市から管理委託を受け、塩竈の魅力の発信場所として、美術や絵画等の作品展やミニコンサートを開催、毎年3月には塩竈deひなめぐりのメイン会場など、塩竈の近代産業の歴史文化を伝える建物として活用しています。

まちの記憶装置として
――旧えびや旅館

2011年の東日本大震災により、塩竈市も津波の大きな被害を受けました。長い歴史を有する港町として、古い建物が数多く残っていましたが、被害は大きく解体を余儀なくされました。

このような中、市内中心商店街にあった旧えびや旅館（震災当時は茶鋪として営業）の解体情報が入りました。所有者は早急な解体を希望していましたが、建物調査をさせていただき、明治初期に建てられた木造3階建ての極めて珍しい造りで、内部には港町の旅籠、遊郭として栄えた面影をとどめる意匠が明らかになりました。当時は私たちも大きな被災を受け、保存活動を行なうことは、極めて困難な状況でしたが、市民の記憶に残してほしいとの思いから、見学会や緊急のシンポジウムを開催し、数多くの方から「何とか残してもらいたい」という意見が出されました。

この建物は、明治三陸大津波や大震災の津波など、度重なる災害を乗り越えたまちの記憶装置として、また市民力の復興の象徴として、次世代に継承することが使命と考え熟慮の結果、取得保存に向けた取り組みを開始しました。所有者や金融機関等との協議、募金活動を展開し買取に向けた道筋を付けました。延べ25回を超えるお掃除会や活用に向けた車座会議。ミニカフェ、歴史講座、音楽会等のパイロット事業を実施し、コミュニティカフェとミニ博物館等として活用する方向性を固めました。商工会議所と連携し、活用計画書を作成、商

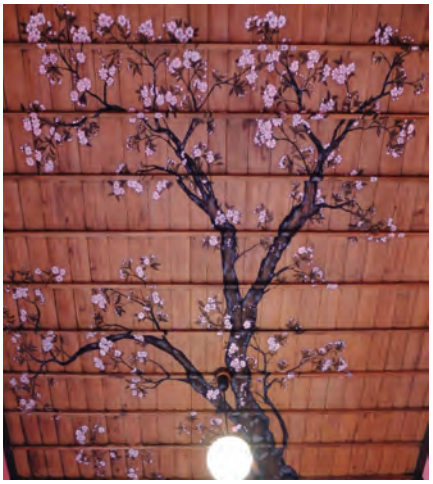


写真4　2018年専門家の指導を受けて東北工業大学建築学科中村研究室の学生や市民の手により遊郭の面影を残す桜の間の天井画を修復（旧えびや旅館）

店街を応援する国からの補助金の獲得、県・民間団体からの助成金、そして数多くの市内外の方からの寄付金や専門家の方々からの助言協力により、2016年明治初期の姿を現代に蘇らせることができました［写真4・5］。

この活動により、中心市街地への新しい人の流れが生まれ、個性ある喫茶店やジェラート店が次々と開店、まちに賑わいが戻りつつあります。また、近隣の方々が町家意匠の新築や外壁改修を行う等、門前町の趣を醸し出す、まちなみ景観にも影響をもたらしています。

おおわだ・しょうじ
一級建築士、宮城県建築士会まつしま支部副支部長、塩竈市役所勤務。東北工業大学建築学科を卒業後、ゼネコン勤務を経て塩竈市役所に入庁、都市計画や建築、下水道、教育行政等を経験、現在は市民生活行政に従事。休日等はNPO活動に参加